Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-08

第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成（学生・大学院生教育）

坂江，渉
添田，仁
河島，真

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,8(平成21年度事業報告書):41-45

(Issue Date)
2010-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002062

日にかけて矢根地区の大石武兵衛家文書の調査を行っている。

なお、奥矢根区有文書に関しては、今年度は進展を見なかったが次年度以降実現することを期待している。（文責・木村修二）

千葉における震災時の資料保全のためのネットワーク立ち上げ支援

本年度、 千葉県立中央博物館教育普及課長の新和を中心として、千葉県の博物館協会が中心となった震災時の資料保全のためのネットワークの立ち上げのための準備が進められ、これに対して、奥村、松下を中心に、本センターの研究員が阪神淡路大震災以来の経験をいかして、これを支援した。10 月には、新和課長をはじめ 3 名の博物館関係者が、本学を訪れ、大震災時の活動について、奥村、松下等から聞き取りを行った。

さらに本年 2 月 7 日には、千葉県立中央博物館で千葉県文化財救済ネットワーク構築推進事業シンポジウム（参加者 100 名）が行われ、奥村が、基調講演「歴史資料ネットワークの構築と活動」で、千葉県の博物館関係者に地域歴史遺産とはなにか、その保全のための組織をいかに構築するかについて述べた。なお千葉県のネットワーク構築事業については、今後も連携していくこととなっている。（文責・奥村弘）

2010年度日本考古学協会兵庫大会の開催に向けての協力

日本考古学協会の 2010 年度大会が、本年 10 月 16 日～ 18 日の日程で、兵庫県の明石市を中心に開催することが決まった。このうち初日の第 1 分科会については、「播磨国風土記と祭祀」というテーマが立てられ(コーディネーターは櫃本誠一大手前大学教授)、センター研究員の坂江渉が報告者の 1 人に選ばれ、「文献資料からみた古代の呪術・祭祀　―播磨国風土記を中心にして―」（仮題）という報告をすることになった。

2009 年の夏以来、2 度の準備会が開かれ、大会・分科会の成功に向けて体制を整えつつある。なお本大会については、センターが後援団体の 1 つに入る予定である。（文責・坂江渉）

第4章　阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

2010 年 3 月 1 日午後 1 時半から、第 10 回震災資料研究会が、人と防災未来センター資料室で開催された。テーマは、「震災資料の整理」。参加者は 8 名であった。昨年題材としては、センター資料室が受け入れた「市外・県外避難者ネットワークりんりん」を取り上げた。資料室の仮整理の状況に続き、「りんりん」で、1999 年実施のアンケート調査に協力した柴田和子氏（元阪神・淡路大震災記念協会嘱託）が、その経過や県外避難者について概要を報告した。意見交換では、資料室でおこなう資料情報の付加の仕方などを具体的に意見交換をおこなった。

2009 年 11 月 28 日、神戸大学附属図書館震災文庫（以下神大震災文庫）と人と防災未来センター資料室（センター資料室）が共催で、阪神・淡路大震災の関係資料の収集・保存の意義を考える講演会を、センターを会場に開催した。また、両機関は、震災関係資料を紹介する合同資料展「資料が語る 阪神・淡路大震災の記憶と現在（いま）」というテーマで、2009 年 10 月 9 日から 10 年 1 月 22 日まで、双方の会場で同時開催した。この合同資料展は、2009 年度神戸大学地域連携公募事業に採択された。

第 8 回地域連携協議会では、2010 年 1 月に、震災から 15 年をむかえることから、「震災資料の 15 年」の報告がおこなわれた。同報告のため、震災資料保存している 17 機関にアンケート調査を実施した。また、震災文庫、人と防災未来センター資料室、尼崎市立地域研究史料館、人・街・ながた震災資料室などには訪問調査をおこなった。（文責・佐々木和子）

第5章　地域歴史遺産の活用をはかる人材育成（学生・大学院生教育）

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成のための教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成 16 年（2004）度から平成 18 年（2006）度まで、工

学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた（文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム）。このような事業によって開発された教育プログラムが、平成 19 年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）と「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の 3 科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。地域連携センターでは、平成 19 年度来、これら 3 つの科目の授業内容と素材を提供している。

3 つの科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解読・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習である。さらに「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用ための企画展示等を自治体関係者や地域住民と一緒に企画考案するような実践的演習である。

専門コースの学生・院生は、この 3 つの講義・演習をすべて履修し、専門外コースの学生・院生は、まず「地域歴史遺産活用演習」を取得し、自分自身の興味にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望ましいと指導された。以下、3 年度目に入った各授業、演習の中身の概要について記す。

1. 地域歴史遺産活用研究（地域歴史遺産保全活用基礎論A＝前期、B＝後期）

《前期・A》① 4/10「序論（講義のねらい）」（奥村弘・人文学研究科教授）／② /17「災害と地域文献史料①」（河野未央・尼崎市立地域研究史料館職員）／③ /24「水損史料の修復ワークショップ」（同）／④ 5/1「災害と地域文献史料②」（佐々木和子・地域連携研究員）／⑤ /08「地域文献史料の活用」（木村修二・地域連携研究員）／⑥ /22「自治体史論Ⅰ」（村井良介・地域連携研究員）／⑦ /29「自治体史論Ⅱ」（大槻守・香寺町史編集室長）／⑧ 6 /5「企業と歴史遺産の活用」（石川道子・地域連携研究員）／⑨ /12「地域文化の担い手の育成のために①-小野市での取組-」（人見佐知子・甲南大学人間科学研究所研究員）／⑩ /19「地域文化の担い手の育成のために②-丹波市での経験-」（松下正和・地域連携研究員）／⑪ /26「地域文化の担い手の育成のために③-神戸市藍那地区での取組-」（森田竜雄・地域連携研究員）／⑫ 7/3「地域文化の担い手の育成のために④-地域博物館論-」（坂江渉・地域連携研究員）／⑬ /10「地域文献史料のもつ広がりと大学の役割」（添田仁・人文学研究科助教）／⑭/17「大学における地歴科教員の養成と地域文献史料」（河島真・人文学研究科准教授）／⑮ /24「まとめ」（市澤哲・人文学研究科教授）

《後期・B》① 10/02「序論」（足立裕司・工学部教授）／② 10/09「兵庫県内の地域の文化財～近代化遺産を中心に～」（足立裕司・工学部教授）／③ 10/16「文化財とは何か」（村上裕道・兵庫県教育委員会文化財室室長）／④ 10/23「兵庫県内の地域の文化財　～仏像を中心にして～」（神戸佳文・兵庫県立歴史博物館学芸課長）／⑤ 10/30「西摂地域の埋蔵文化財の保全・活用」（森岡秀人・芦屋市教育委員会生涯学習課文化財担当主査）／⑥ 11/06「兵庫県内の地域の文化財　～埋蔵文化財・文化的景観の保全・活用をめぐって～」（岡﨑正雄・兵庫県立考古博物館事業部部長）／⑦ 11/13「近世地域絵画資料の保全と活用」（明尾圭造・芦屋市立美術博物館学芸課長）／⑧ 11/20「博物館運営と歴史遺産の活用」（山地秀俊・経済経営研究所教授）／⑨ 11/27「美術工芸品の保存・修復」（内田俊秀・京都造形芸術大学芸術学部教授）／⑩ 12/04「歴史的環境の概念とその保全」（足立裕司・工学部教授）⑪ 12/11「歴史的建造物の保存・修復」（足立裕司・工学部教授）／⑫ 12/18「兵庫県内の地域の文化財～寺社・民家を中心に～」（黒田龍二・工学部准教授）／⑬ 1/15「地域にのこる農業遺産の保全・活用」（堀尾尚志・神戸大学農学部名誉教授）／⑭ 1/22「都市景観とまちづくり」（三輪康一・工学部准教授）／⑮ 1/29「障害者にやさしい歴史遺産の活用」（高田哲・医学部教授）

《全体を通じて》本年度も昨年度に引き続き、A の講義を「地域文献史料」に関わる講義として、

B をそれ以外の「地域歴史遺産」、すなわち歴史的建築物・美術工芸・埋蔵文化財・農業遺産・都市景観等に関わる講義として編成した。B の講義では、今年度初めて神戸佳文氏や明尾圭三氏などを講師として招き、県内の仏像文化財をめぐる状況や、芦屋市立美術博物館の取組などについての授業をして頂いた。

毎回の講義には、原則として坂江がコーディネーター役として参加し、講師と受講生のやりとりや質疑応答等を受け持った。これにより全体としての講義の主旨やねらいがある程度伝わったと考えられる。前後期とも受講生は、25 名前後であった（文学部・工学部・経済学部・経営学部・発達科学部など）。（文責・坂江渉）

2、地域歴史遺産活用演習（学部授業名は地域歴史遺産活用演習A）

地域の歴史遺産、とくに古文書等の文献史料の分類・整理・解読・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習として、今年度も事前指導講義、および2 泊 3 日の合宿形式（集中講義）で行った。

《事前指導講義》2009 年 9 月 1 日、非常勤講師の石川道子、森田竜雄両研究員が、合宿当日に整理する御影村文書をもとに編集した「古文書テキスト」をもとに講義を行い、古文書解読に関する基礎的な知識を身につけさせた。

《古文書合宿》2009 年 9 月 2 日～ 9 月 4 日。神戸市西区保養センター太山寺なでしこの湯で開催。「地域歴史遺産保全活用演習 A」（文学部）「地域歴史遺産活用基礎演習 A」（文学研究科）「地域歴史遺産活用演習」（人文学研究科）「博物館実習 B 事後実習」（学芸員資格取得希望者）の履修生のほか、日本史研究室有志の学生・院生、センター研究員、担当教員および大学図書館職員など約 50 名が参加した。

例年通り、まず史料整理上の注意、扱う文書の中身に関する基礎的な説明を実施。その上であらかじめグループごとに、文書整理と解読作業を開始した。途中、古文書の撮影に関するワークショップもおこなった。最後に、班ごとのまとめと、地域史料の活用をめぐる討論会を実施した。

今年度も、昨年度と同様に、すでにある程度の整理がすすんでいる古文書テキストの使用、同一班内に初心者と上級生を混合する班編成、班内におけるペア作り、あるいは目録カードにおける「備考欄」の充実化をめざす（後に全く素人の人がみても分かり易い説明の表記）などをおこない、初心者にとっても上級生にとっても、古文書整理がしやすい環境を整える努力を試みた。

ただし、各班の班長として地域連携研究員を配置するシステムをあらため、大学院生を班長とすることで、学生たちが責任を持って整理に取り組むことができる班構成を心がけた。また、やや詰め込みすぎとの指摘を受けた昨年度の反省を活かし、ワークショップを古文書撮影に限り、古文書を読解する時間を多く確保した。

なお昨年度同様、連携関係がすすみつつある本学図書館職員が参加し、事前指導講義には 5 名、古文書合宿には 2 名の職員が、学生と一緒に古文書整理について学習した。（文責・添田 仁）

3、地域歴史遺産活用企画演習

①演習の趣旨

本演習は、古文書合宿という形式で、平成 22 年 2 月 20 ～ 21 日、朝来市生野書院・生野マインホールにおいておこなった。なお、今年度は文科省大学院教育改革支援プログラム（以下、院プロと省略）の一環（古典サロン）として位置づけられ、大学からは、教員 7 名・大学院生 16 名（うち履修者 12 名）・学部学生 18 名（うち履修者 7 名）の計 41 名が参加した。

本演習は、将来、地域歴史遺産の保全・活用を実践しうる地域リーダーの養成を目的としている。前期から開講してきた地域歴史遺産の活用に関する授業や演習で学んだ知識を、現場で活かす場であり、いわば実践編として位置づく。事前にガイダンスをおこない、実践的な古文書整理の方法や生野銀山について、大学からの参加者が知識を共有できる環境を整えた。

＜ガイダンス＞

■ 2010 年 2 月 15 日（月）13:30 ～ 16:00

13:30　合宿の趣旨（添田）
　　生野銀山・石川家文書の概要（添田）
14:30　現状記録の方法（添田）
15:15　目録作成の方法（前田）

＜古文書合宿＞

■ 2010 年 2 月 20 日（土）

9:30　文学部前ロータリー集合
12:00　生野銀山見学
14:30　生野銀山町内の散策（海崎）
16:30　古文書整理開始
20:30　整理終了

■ 2010 年 2 月 21 日（日）
9:00　古文書整理開始
12:00　整理終了、片付け・掃除
　　企画展の閲覧、町内自由散策
13:00　座談会（石川通敬）
14:00　座談会（山田定信）
16:30　生野書院発
18:00　神戸大学着、解散

②プログラムの概要

（イ）銀山坑道の見学、銀山町内の散策（2月20日）

生野銀山の古文書を整理する前提として、生野が如何なる特色の地域であったのかを知っておくために、フィールドワークを設定した。まずシルバー生野職員の案内で、鉱山資料館と金香瀬坑道を見学した。ついで古文書学習会の海崎氏の案内のもと、銀山町内のうち生野代官所周辺の散策をおこなった。

（ロ）古文書整理（2月20日～21日）

石川家文書を用いて、地域住民の方々とともに古文書整理を行った。市民 8 名の参加を得た。

例年のように、一度整理を終えた古文書ではなく、石川家文書のうち未着手のものを使用した。とくに桐箱に入った古文書の保存状態をデッサンしながら記録し、その上で整理をおこない、もとの桐箱に戻すという現状記録作業を体験させた。

（ハ）生野書院常設展・企画展の閲覧

生野書院の常設展と、企画展「生野銀山間歩絵図展」を閲覧し、古文書から歴史像を描き出す手法を学んだ。後者は、郷土史家の山田定信氏がすでに準備していた絵図・解説に、より市民にわかりやすくするために三村昌司が解説を加えた。

（ニ）郷土史家をかたる座談会（2月21日）

石川通敬氏には、父親であり、郷土の歴史家であった石川準吉氏についてお話いただいた。また、山田定信氏には、三菱マテリアルでの勤務経験や現在の間歩調査の苦労、今後の研究展望などをお話いただいた。実際に古文書を所蔵している家ゆえの経験や論理、自治体に対する思いなどについてお話いただいた。

③演習の特徴

（イ）実践的な古文書整理：昨年度同様、演習全体として、地域遺産の保存・活用をめぐる実践的な能力を身につけさせることを最重要課題においた。とくに、古文書は整理未着手のものを用い、整理作業についても、古文書を桐箱から出して整理し、もとのかたちに復元するまでの一連の過程を体験させた。とくに、将来フィールドワークを行うなかで発見した古文書を、簡便かつ正確に記録・整理・保存する方法を身につけてもらうことを目指した。

（ロ）市民との対話力：鉱山坑道や銀山町内散策の案内を市民に依頼し、学生が市民から学ぶ場を設定した。また、企画展「生野銀山間歩絵図展」では、研究者が研究成果を市民にアウトリーチする方法を提示し、座談会では研究者や学生が市民と直接対話する場をもうけた。古文書整理は、学生と市民が協同でおこない、互いの知識や意見を交換しながら歴史遺産を保存・活用する場として設定した。ただ、今年度については市民の参加者が少なく、学生中心になってしまった。

（ハ）院生のコーディネート力の養成：演習の準備をすべて研究員が行うのではなく、意図的に大学院生に振り分けることで、演習に対する彼らのモチベーションと緊張感を維持させた。来年度は、年度を通して市民と協力したプロジェクトを展開し、そこへ履修者の一部を定期的に派遣し、長いスパンで地域コーディネートの意味について考えさせる機会をもうけたい。

④履修者の感想と来年度の計画

履修者からは、「公的な機関（行政）では対応できないことでも、大学ならば対応することができ、地域の歴史を一緒に考え、一緒に明らかにし、それを社会に発信させていくことができる」、「古道具、文書、看板、瓦、建物など、生野ではさまざまな歴史遺産を見たが、博物館や美術館などで見るのと、実際にその土地で、その所有者の話を聞きながら見たりするのとでは、たいへんな差があるように感じた。博物館などに比べて、「保存」の点では質が劣るかもしれないが、地域にあってこそ価値があるものばかりであり、「活用」の点に関しては最も理想的な形だと思う」「史料を残していくのが困難な場合、何を残していくのか、それはどのような基準によって決定していくのかなど、それらは様々な場合によって異なるであろうが、まだまだ検討する必要がある」といった意見が寄せられた。

来年度も引き続き院プロとの共同事業になる。これを機会に、複数専修の院生と協力しながら、現地の古老への聞き取りをすすめていく予定である。

（文責・添田仁）

地歴科教育論D

2006 年度と 2007 度の 2 年間にわたって、文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」の採択を受けて実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業の継続・定着をはかるため、2008 年度に引き続き 2009 年度も前期に地歴科高校教員の資格を得るために必要な授業科目「地歴科教育論D」（前期・金曜 3 限）を開講した。前年度までと同様に、教室での講義も 4 回行ったが、今年度も兵庫県立御影高等学校総合人文コース 2 年生（2 年 6 組）の課題学習支援が中心となった。

授業では、22 名の受講生が、「ポートピアランド」「Familiar」「神戸の洋菓子から KOBE の洋菓子へ」「みんなから愛される南京町」「KOBE feat. SEATTLE!」「神戸の『水』について」「IKUTA SHRINE」「王子動物園」のテーマで、8 グループに分かれた 2 年 6 組の生徒を分担して指導し、研究成果は各グループごとにパワーポイントにまとめられ、11 月 13 日（金）のクラス発表会を経て、最も評価の高かった 2 つの研究（「みんなから愛される南京町」「KOBE feat. SEATTLE!」）が学年全体の課題研究発表会へと進んだ。

また、「地歴科教育論 D」の受講生の中から希望者を募り（2 名が応募）、年度末の 2 月 4 日（木）に、御影高校第 1 学年の世界史 A、第 2 学年の日本史 B の授業を提供してもらって、地域の視点を取り入れた世界史と日本史の研究授業を行った。（文責・河島真）

第6章 平成21年度文部科学省・大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とした人文学教育」との協同

1、趣旨

神戸大学人文学研究科は、平成 20 年度文科省・大学院教育改革支援プログラムに採択され、10 月から実質的な活動を開始した。これにともない、地域連携センターも、同プログラムと協同して様事業を展開することとなった。

今日の社会においては、「文化・政治をめぐる諸制度にゆらぎや軋み」が大きな問題となっている。これらは単なる現象の理解や対症療法では解決できない現代の諸問題である。こうした現代においては、人文学研究者に対して、①専門深化による省察や批判、②文化の継承・発展、③現実的諸課題への関わりの強化、④異なる専門を理解し融合する能力が求められる。すなわち、原点に立ち返って抜本的に再検討する能力と、専門閉塞を打破し、課題を巡る具体的な応用によって、解決につなぐ能力とが同時に求められている。

こうした課題・社会的要請に対応するためには、まず原点に立ち返って原理的に考察する能力や学域を横断して人文学共通の課題を理解する基盤的素養が必要と考え、これを「古典力」とよぶ。また身をもって社会的現実を知る能力、および他の学域や社会と意思疎通できる高度な学術的能力が不可欠である。これを「対話力」とよぶ。

これら双方の能力を養成するために、新たな教育プログラムとして「人文学フュージョンプログラム」の構築を目指す。本プログラムでは、人文学を現代的に深化させ、現実的諸課題に対応しつつ、学域を横断して発展させるための基盤的素養としての「古典力」の涵養を図り、また、この基盤の上に、異なる領域の専門家や市民と意思疎通し、人文学の学術的融合を推進できる、幅広い「対話力」を兼ね備えた人材を養成する。

「人文学フュージョンプログラム」では、学生の主体的な活動を展開する 4 つの場を設定、対話的指導体制の更なる充実を図る。具体的には、前期課程の「基盤プログラム」と後期課程の「発展プログラム」を構築する。基盤プログラムとして、「古典力」と「対話力」の基盤的能力の涵養のための「融合人文学基盤科目群」を開設する。発展プログラムとして、「古典力」と「対話力」を学術的かつ応用的に発展させるため、「融合人文学発展科目群」を開設する。さらには、古典力と対話力を涵養・応用・深化・展開を図る「場」として、「古典ゼミナール」、「コロキウム」、「古典サロン」、「フォーラム」を設け、各科目で活用していく。

「古典ゼミナール」は、異なる専攻の学生が集う自主的な勉強会・読書会の場である。現代の人文学で共通の鍵となる諸概念の基礎的理解や問題認識能力を養う。「コロキウム」は、若手研究者中心の研究報告会の場である。海外連携大学との共同実施などを通した古典力と対話力の学術的展開をはかる。「フォーラム」は、異なる学域の専門家との学術的対話を、若手研究者が共同で企画・運営し、社会と